

# 明治初期の子育て書における発達概念の使用

## — 近代日本における発達概念理解についての一考察 —

前田 晶子

(2004年10月16日 受理)

### The Concept of Development as Depicted in Child Rearing Books in Early Meiji Japan

MAEDA Akiko

#### 要約

本稿は、近代日本における発達概念の理解について、明治初期の翻訳子育て書を対象として分析を行ったものである。発達概念をめぐる批判的検討が蓄積されつつある研究状況の中で、その歴史的分析が不可欠であると考え、特に日本において西洋発達概念が翻訳される過程に着目し、その翻訳作業にみられる固有の発達理解を考察した。その結果、2通りの訳語－発生と発達－が、その両者の関係を連続的に捉えることなしに個別に用いられていたことから、その点に生命発生のメカニズムの解明を課題としてきた西洋の発達研究との決定的な違いがあることを指摘した。

キーワード：発達概念の形成、翻訳子育て書、医学的子育て論

#### はじめに

「発達」という言葉は、教育学や心理学を専攻する研究者はもちろん、保育士や教師、保護者など日常的に子どもにかかわる人々のあいだでも、当たり前の、そして重要な言葉として書かれ、語られている。しかし、そもそも何をもって発達というのかと問えば、その内容は必ずしも明確ではないであろう。また、この言葉がどこから生まれ、いつ頃から広く使われ始めたのかということも自明であるとはいえない。それでも、この言葉が戦前・戦後を通じて、日本の近代教育の基礎概念でありつづけていることは疑いない。

他方で、近年この概念はさまざまな領域において検討課題となっている。それらの議論は近代批判の系譜において登場しているものであるが、心理学や教育学において基礎概念が揺らいでいると

いうことや、学校や心理臨床の現場において従来の概念では実践が立ち行かないことなども反映したものと見えよう。また同時に、間近にせまりつつある教育基本法「改正」論議などの政策レベルにおける動きにおいても、従来の公教育の枠組みが変更されようとしつつあることと連動しているとみるべきであろう。本研究は、これらの動向をふまえて、近代日本において発達概念がどのような意味内容をもって用いられてきたのかを歴史的に明らかにすることを目的としている。筆者はこれまで近代日本における発達概念の形成史を江戸後期から明治初期の学問領域における翻訳作業に着目して明らかにする研究を進めてきたが<sup>1</sup>、本論文はその研究の一環に位置づくものであり、特に明治初期の翻訳子育て書を対象として分析を行ったものである。

## 1 発達論批判の現在

日本では、発達論批判が登場したのは高度成長がかけりをみせはじめた頃と軌を一にしての1970年代後半であった<sup>2</sup>。当時の議論は、どちらかといえば障害児教育の領域における限定的なものであったが、90年代以降は、心理学の新しい動きやポストモダンの潮流の中で、領域横断的な議論として登場している感がある<sup>3</sup>。

戦後日本の教育学をどう評価するかをめぐっても、その基礎概念である「発達」への根本的な懐疑が出てきている。今井康雄は、堀尾輝久が「教育学的公共性」のための理論的根拠を「『政治』から『子ども』へ」(堀尾)と移行させ、いわば誰もが反駁できない「人権」や「発達」という概念に純化させることで、逆に現実の教育活動を導く視点を欠如させていると批判する。

「発達」への賛同の満場一致のなかに見るべきは、長く求められてきた公共性の実現ではなく、私的な利害と国家的・経済的利害の共棲の罫だったのである。個人の発達への賛同は、この共棲を何ら断ち切るものではない。逆である。この共棲を議論の対象とし、そのことによって「発達」の名における個人の能力の無闇な搾取に歯止めをかけうる教育学的公共性が存在しない限り、個人の発達への賛同はむしろこの共棲を促進するのだ<sup>4</sup>。

今井がいうのは、戦後教育学の困難が発達への権利の不在にあるということではなく、その逆である。つまりその困難は、発達の重視は必ずしも教育における共同性や公共性を生み出さず、逆に個人間の競争を正当化し、さらには国家や経済界の利害をも肯定するという点を反省的に分析していない点にあるということである。このような指摘は、近年の教育改革における新自由主義的動向をみれば、正鵠を得たものといわざるをえないだろう。

森田尚人もまた、次のように述べて発達概念の問題性を指摘している。

実証科学としての発達心理学の歩みを批判的に検討するならば、それが当初の楽観的な期待

を実現することからほど遠いものであったことが知られるであろう。むしろ、それが教育の世界にもたらした歴史的帰結はきわめてアイロニカルなものであった。自然に従う発達の道筋の解明と発達段階に即した教育という理念は、子どもの発達を科学的な合理的思考へ向かうプロセスとして規格化し、その効率的な統制を可能にするものであったからであり、また個性ないし個人差への関心は、IQテストに象徴されるような統計的な数値による客観的な選別メカニズムを生み出すことになったからである<sup>5</sup>。

19世紀に登場する発達心理学がダーウィン進化論に由来することは広く知られているが、森田の一連の研究<sup>6</sup>は、その「進化論的発達観」がなぜ社会統制という政治イデオロギーと結びついたのかを明らかにするものである。すなわち、人間の発達をめぐる「遺伝-環境」論争は発達心理学を実証科学として成立させる基盤を提供するために繰り返されたのであり、他ならぬそのことが発達概念やその変数としての知能や能力を実体化し、測定可能なものとする信念を生み出してきたというのである。ここから、発達への関心が選抜メカニズムを肯定する回路が浮かび上がってくるのである。

ところで、森田はこのような「進化論的発達観」の前史として、17、8世紀における「前成説-後成説」論争に遡って検討を加えている。彼は、予め全てのものが備わっているとすることで生命の発生のメカニズムを機械論的に説明しようとする「前成説」においてもその生命の起源を説明する際には「神」を想定せざるをえなかったし、また生命が単純なものから複雑なものへと変化していく過程を説く「後成説」も本質力といった生氣論の説明に頼らざるを得なかったとして、ともに発達を神によって与えられた目的が実現される過程とみなす「目的論的発達観」を有していたと指摘する。そして、目的論に頼らずして生命の活動を説明することを目指した「進化論的発達観」において、パラダイム転換が起こったと分析しているのである。

このように西洋では生物の形成過程をめぐる機械論対生氣論という長期に渡る論争があり、発達概念もその旧パラダイムの乗り越えの過程で成立してきたという点を、日本における発達概念の形成史を辿る上でどのように考えればよいただろうか。森田が指摘するように「進化論的発達観」もまたその内部に政治性という「アキレス腱」を抱えていたとはいえ、生命発生のメカニズムを把握する際に神秘性の排除を課題としてきた西洋の事情は、明治に入り翻訳語として「発達」概念を採用していく日本の文脈とは大きな違いがあるのではないか。以下では、明治初期の翻訳状況を検討する中で、日本における発達理解の性格について考察していきたい。

## 2 「発達」概念をめぐる明治初期の翻訳状況

### (1) 発達概念の訳出とジャンルの問題

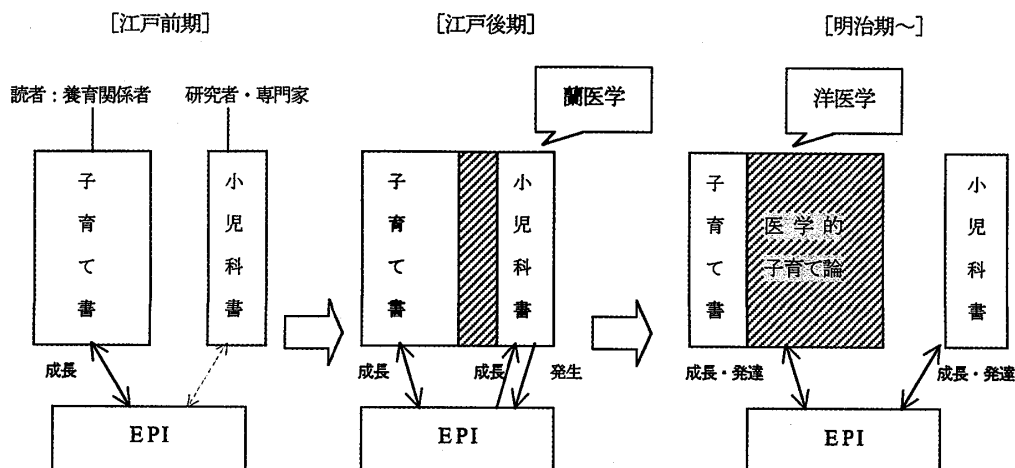
日本において初めて西洋発達概念が重要な概念として訳出された書が堀内素堂『幼幼精義』<sup>7</sup>

(1843年)であったことは、次の2点において注目に値する。まずそれが医学者の手によって行われたこと、そして蘭語 *ontwikkeling* (英: *development*) に「発生」の語が当てられたことである。堀内は、歯が生え始める時期を「発生期」と名付け、「発生は、小児初生し、諸機漸く將に發せんとするの候、猶草蓀初めて生じ、木芽初めて發し、風行雨施の化を待つ時のごとく也」(1丁オ)として、子どもの身体のさまざまな器官がまさに活動を開始しようとしているこの時期の特徴を表現している。「発生期」に少しでも処方を誤れば、将来的に大きな問題へと発展するため、医者はその成長の芽を妨げないよう配慮しなければならず、それは小児科医に必須の専門的知識であるとされたのである。

この幕末の医者による訳出は、後でみるように明治期の *development* の翻訳作業に影響を与えたが、結果的には限定的なものに止まるものであった。「発生」という訳語は、生物学などの領域で継承されるものの、子どもの成長に関しては「発達」の語に取って代わられるからである。なぜか。

訳語選択の問題を考えるにあたって、当時の社会における子どもをめぐる言説のありようについて考慮することが必要である。ここでは、Ethnopsychological Pool of Ideas (EPI) 論を用いて、その図式化を試みたい。EPIとは、「ある時点における特定の社会が文化的に保持している、子育てに関するアイデア(それは、知識・方法・情操・価値などを含む複合体である)のまとまり」<sup>8)</sup>のことであり、子育てに関する社会の「知恵袋」といった枠組みを想定するものである。小嶋秀夫によれば、親や子育ての実践家と医者などの専門家はひとしくEPIから智恵を借用したり、逆にEPIに新しい知識を付加しているという。とすれば、小児科医が「発生」と訳出したことは、EPIとの関係でどのように位置づけられるだろうか。

江戸期の子どもをめぐる言説のジャンルには、小児科書領域と子育てに関する書物群とがあった。前者は、研究者や専門家が子どもの身体(疾病)を論じるものであったが、その記述スタイルは疾病とその処方を列挙するのみで、疾病と年齢に応じた成長過程との関係については無関心であった(成長論ぬきの疾病論)。一方後者は、子育て経験者が一般の父母を読者と



して子育ての方法を指南するもので、主として子どもの学習過程について論じている。しかし、それは身体メカニズムに即した記述方法をとるものではなかった（身体論ぬきの学習論<sup>9</sup>）。つまり、両者はともに子どもを記述対象としながらも、全く異なるジャンルを形成していたのである。

この2ジャンルは、江戸後期から西洋の発達概念の訳出が行われた幕末にかけて、重なりをもち始めるようになる。子育て書はかつてから成長についての知恵をEPIから採用していたが、西洋医学の影響のもとで小児科書領域においても成長のメカニズムへの関心が高まり、EPIから積極的な成長論の摂取が行われたからである。この接近は、小児医学を子どもの発達過程に即して再構成することを促したと同時に、子育て書ジャンルを再編することにもなった。つまり、子育てには医学的な知識が不可欠とされ、子どもの身体に即した学習論が説かれるようになったのである。この「医学的子育て論」は、明治以降子育て書ジャンルの主流を占めていくのである<sup>10</sup>。

このようなジャンルの再編過程で、一度は小児科書において「発生」の語が生まれ、EPIに付加されようとするが、それは定着せず、やがて「発達」に置き換わる。このことは、「発生」がEPIに馴染まなかったか、あるいはdevelopment理解が「発生」と「発達」に分化したことを予想させる。この点について、次に明治初期の翻訳状況をみていきたい。

## (2) 医学領域における「発生」「発達」の使用とdevelopmentの包括的理解の試み

明治期に入り、西洋医学を積極的に摂取するようになった小児科領域では、「発生」や「発達」という語を使用することが一般的となる。その用法をいくつかの例から確認していこう。

「発生」については、疾病が生じる際に用いられるのが通例だが、中には生命活動の障害を指摘する文脈で「発生」が登場しているものがみられる。これらは堀内素堂が行った初期の翻訳を踏襲したものと理解される。

此脊髓刺衝ノ原因ハ（中略）成長及発生機ノ異常ニアリ<sup>11</sup>

尤モ多キハ一種成長異常及発生障碍ノ発症トナリテ起ル是ナリ即チ歯牙ノ交換、春意ノ発動、迅速ナル身体ノ成長、体質ノ虚弱、及全身ノ貧血、ハ成長異常及発生障碍ニ属スル者ナリ<sup>12</sup>

栄養善良ナル小児ノ歯牙発生ハ栄養不良ノ者ニ比スレハ早く且順正ニノ列序ヲ乱サズ<sup>13</sup>

また、同じ文脈で「発達」の語も使用されている。

幼稚ノ小児ニ於テ精神機能ノ発達ヲ妨ケ言語ノ如キ殊ニ時ニ及ンテ発達セス<sup>14</sup>

（膿漏性結膜炎の）第三階ハ第一及ヒ第二階ヨリ時期ノ別ナク発達シ又持久ノ前駆症ナク極メテ急速ニ発シ來ルモノ<sup>15</sup>

これらの語彙の使用に関しては、原書との対象作業を行っていないために十分な考察に至っていないが、疾病の生起に際して、また生命活動が疾病により妨げられるという際に「発生」と「発達」が混在して用いられている状況を指摘することができよう。

他方で、明治初期の集中的な翻訳作業に関わった知識人の中には、「発生」と「発達」の関係を意識的に追求する試みがみられた。田中昌人は、ミルやスマイルズの翻訳で知られる中村正直の development 理解について、次のように分析している<sup>16</sup>。

まず、『自由之理』(Mill, J. S. *On Liberty* (1859), 1871~72年訳出)の草稿において、1872年3月に development の訳語として初めて「発達」の語が用いられたことを指摘している。

A government cannot have too much of the kind of activity which does not impede, but aids and stimulates, individual exertion and development.

凡ソ政府ハ、各箇人民ノ自ラ才思智力ヲ発出暢達スルモノヲ妨碍セザルベキノミナラズ、コレヲ資助勤励シテ、ソノ獨自一己ノモノヲ発達セシムベシ

ここでは「獨自一己」(individual)に対して「発達」が用いられている。この訳語選択は、どのような意味内容をもっていたのだろうか。続いて田中は中村の別の訳書『西洋品行論』(Smiles, S. *Character* (1872), 1878~80年訳出)を検討し、徳の出現に対して「発生」が、品行の形成に対して「発出」が採用されており、これらが「獨自一己」の基底をなすとの理解があったことを指摘している。ここで田中が整理している語彙は必ずしも develop や development の対訳に限定されていないが、「生成のカテゴリーの順序性としては、徳の『発生』から、品行の『発出』へ、さらに獨自一己なるものの『発達』へ」<sup>17</sup>という生成過程の連続的な把握が中村の翻訳作業にうかがうことができるとしている。つまり、中村は「発生」と「発達」の訳語を使い分けつつ、中間に「発出」という媒介項をおくことで段階論的な理解を示し、「発達」はその最も高次の段階に用いていたことになるのである。

### (3) 翻訳子育て書にみる「発達」理解

次に、学問領域とは相対的に独自のジャンルを形成していた子育て書領域をみてみよう。ここでは、共に中村正直と接触のあった二人の静岡県士族によって行われた翻訳子育て書を取り上げ、原書との比較を行ってみたい。

一人目は、洋書調書や文部省、司法省などに勤務した近藤鎮三(1849-1894)である。彼は『母親の心得』(1875年)を翻訳したが、これは「発達」という語が用いられている初期の書物として注目されるものである。この書には中村正直の序が付されており、また女学校の教科書として用いられていたとされている。今回参照したドイツ語本は1881年版であることや、そもそも抄訳であることなどから、完全な対応関係の検討には至っていない。また国会図書館本は一部の版木が抹消されているなど、限定的条件のもとではあるが、以下「発生」と「発達」

の用法を検討していきたい<sup>18</sup>。

原書は母親による子どもの身体面、精神面、道徳面における教育の三部で構成されているが、『母親の心得』は前二者を上下編に分けて翻訳しており、道徳については他日を期すとされている。まず、身体面を扱った上編 (Die Mutter als physische Erzieherin ihres Kindes) をみると、ここに「発達」の語は全く見当たらない。他方で「発生」は「小児病気のときの心得」の項に4カ所登場しており、「療癒ハ小児断乳の後他の飲食の滋養を受るの頃に発生する」(上編51丁オ) というようにすべて疾病に用いられている。「発生」と *Entwicklung* との対応関係はなく、対応関係が判明したところではこれらは *hervorufen* や *äußern sich* の訳出であった。

一方、子どもの精神的側面の教育について論じた部分を訳した下編 (Die Mutter als Erzieherin der geistigen Anlagen ihres Kindes) では、「発生」は用いられていないが、「発達」が7カ所で使用され、全て「智慧」に対して用いられていることが分かった。そのうち *Entwicklung* との対応関係が確認されたのは次の1カ所である。

食物も過れば胃腑を損じ消化を妨げ終に成長 (*Wachsthum*) の害となると同理にて精神も亦余に勞せば自ら衰弱して智慧の発達 (*Entwicklung*) を妨る<sup>19</sup>

このように、疾病に対して「発生」が用いられていることは小児医学領域と共通した特徴であるが、「発達」に関しては知識面に限定して使用されている点が注目されよう。

続いて、林惟純が訳出したフェルプス著『女子教草』(1879年)を検討しよう。伝習掛であった彼は、静岡学問所の廃止に際して(1872年)、その施設である伝習所の施設や書籍を引き受け、私費による運営に携わった人物である<sup>20</sup>。

原書に登場する計11箇所の“*develope*”“*development*”は、『女子教草』では10箇所が訳出されている。それらを身体論に関する項と教育や知能について論じたそれ以外の項とに分類した(表1)。その結果、「健康に関する項」では、「発」を伴った熟語が目立ち、具備され

表1 『女子教草』における“*develope*”及び“*development*”の訳出

健康に関する項に 関	五官の <b>発露</b>	<i>development of the senses</i>
	其身力、 <b>生長</b> の速なるに於ては、	<i>in the rapid development of their physical powers</i>
	其生長、 <b>発露</b> に於ては、	<i>in their (mental habits) growth and development</i>
教育及び 知識に 関する項	其形体力の、充分なる <b>発頭</b> を表せり、	<i>full development of bodily powers</i>
	知識を研くなり、	<i>cultivating and developing the mental powers</i>
	心志の隠然たる力を、 <b>養成</b> し、	<i>developed the latent powers of their minds</i>
	知覚の勢力を、 <b>競起</b> せしむるを、	<i>to the full development of the mental powers</i>
	其智の勢力を、 <b>習熟</b> することを、	<i>strengthen and develope themselves (mental powers)</i>
	智の才能、充分に <b>頭れん</b> として、	<i>all the faculties of the intellect are in their full progress of development</i>
	心の他の勢力を、専ら <b>使用</b> するものハ、	<i>the other powers develope</i>

(註) 太字が対応する訳語である。

た力が生起するという意味に解されているのに対して、後者の「教育及び知識に関する項」では、「養成」や「習熟」など知の修練といった意味合いが強くなっていることが分かった。

上記二書の訳語の選択傾向を総合してみると、明治初頭の子育て書では *Entwicklung* や *development* と「発達」の明確な対応関係はいまだみられないこと、知性の成長に関してのみ「発達」の語が限定的に採用されていること、精神面の修練として理解された *development* には「発」の語が忌避される傾向をうかがうことができる。このことは、医学領域において初めて採用された訳語「発生」が、子育て領域では用いられにくい土壌があったことを示しているといえよう。さらに仮説的にいえば、「発生」と「発達」の使い分けの傾向から、当時の子どもの成長をめぐっては、身体面と精神面を総合的に捉えることが困難であったことを示唆しているのではないだろうか。

## おわりに

森田の研究が示しているように、西洋の発達概念は生命発生の起源をいかに説明するかという論争にそのルーツをもつものであった。他方で、日本では訳語選択の段階において「発生」と「発達」が連続的に理解されていたとはいえ、そのような試みは一部の知識人にみられたに過ぎないものであった。ましてや子育て領域では、身体論と切り離されたところで知性に対して限定的に用いられるという状況がみられたのである。このことは、日本における発達概念の理解が「目的論の排除」という西洋における課題を共有していなかったことを意味していると思われる。とすれば、発達概念の政治性が問題化している現在、とりわけ日本の教育学においては徹底的な発達概念の批判的検討が必要であり、それなしには今井の指摘する教育をめぐり困難の克服は不可能であるといえよう。

\*本研究は文部科学省科学研究費補助金若手研究(B)2003-2004年度「明治期の教育関係書にみる発達概念の登場と近代日本の大人-子ども関係」(課題番号:15730364)の研究成果の一部である。

- 1 前田晶子「江戸後期の医学における子ども認識」『日本の教育史学』第43集, 2000年, 同「成長論における翻訳語彙の役割」一橋大学一橋学会『一橋論叢』第124巻第4号, 2000年10月。
- 2 その代表的議論が山下恒男『反発達論』現代書館, 1977年。
- 3 そのような研究動向に影響を与えたものとして, M. フーコーの研究を挙げることができる。
- 4 今井康雄「見失われた公共性を求めて」『近代教育フォーラム』第5号, 1996年。
- 5 森田尚人「発達観の歴史的再構成」『教育学年報3』世織書房, 1994年, 102頁。
- 6 森田尚人「ダーウィン進化論と発達概念の転換(上)~(下)」『教育学論集』中央大学教育学研究会, 第34, 36, 42集, 1992, 1994, 2000年, 同「近代教育学における発達概念の系譜」『近代教育フォーラム』



近代教育思想史研究会，1995年。

- 7 『幼幼精義』はドイツの生気論者 Hufeland, C. W. 本の Saxe, J. A. による蘭訳からの重訳である。Hufeland, C. W. *Bemerkungen über die natürlichen und geimpften Blattern, verschiedene Kinderkrankheiten, und sowohl medizinische als diätetische Behandlung der Kinder* (1798)。
- 8 小嶋秀夫「児童心理学の誕生と<老人>」中村桂子，宮田登他『老いと「生い」』藤原書店，1992年，278頁。
- 9 例えば貝原益軒「和俗童子訓」（1710年），山住正己，中江和恵編注『子育ての書2』（平凡社，1976年）所収。
- 10 前掲「成長論における翻訳語彙の役割」。
- 11 スタイネル『小児科』長谷川泰訳，1876年，36丁ウ。
- 12 前掲『小児科』，37丁オ。
- 13 弘田 長『児科必携』増訂第5版，1899年（初版1888年），24頁。
- 14 瀬川昌耆『小児病各論』2版，1886年（初版1884年），125頁。
- 15 前掲『小児病各論』，64頁。
- 16 田中昌人「文明開化期における発達概念の導入について」『京都大学教育学部紀要』34号，1988年。
- 17 前掲「文明開化期における発達概念の導入について」，116頁。
- 18 『母親の心得』の原書は Klencke, Hartmann 著 *Die Mutter als Erzieherin : ihrer Tochter und Sohne zur physischen und sittlichen und Gesundheit vom ersten Kindesalter bis zur Reife* (1870)。訳書序では「ハルトマン氏の養生説を加へ共に訳す」とあるが，原書との対照作業から主にはクレンケ本の抄訳であると推測される。また，著者クランケと訳者近藤について，及び出産に関する箇所本版木抹消の事情については小嶋秀夫『子育ての伝統を訪ねて』（新曜社，1989年）に詳しい。
- 19 前掲『母親の心得』，下編4丁ウ（原書，364頁）。
- 20 静岡県『静岡県史』通史編5現代一，54頁。今回用いたものは国会図書館所蔵の初編と二編であるが，目次に掲載されている第三～七編は未見である。原書は Phelps, Lincoln *The Fireside Friend* (New York, 1868)。